

ダウントン物語

前篇

市川森一



ダウンタウン物語

前篇

市川森一



筑摩書房

著者略歴

市川森一（いちかわ しんいち）

1941年、長崎県諫早市生まれ。日本大学芸術学部卒。

1979年、「黄金の日日」（歌舞伎座・上演）の戯曲により大谷竹次郎賞受賞。

1981年、「港町純情シネマ」（TBS）「チャップリン暗殺計画」（日本テレビ）で芸術選奨文部大臣新人賞受賞。「十二年間の嘘」（TBS）で1982年度芸術祭テレビドラマ部門優秀賞受賞。1983年、「淋しいのはお前だけじゃない」（TBS）により第1回向田邦子賞、第15回テレビ大賞、第20回ギャラクシー賞受賞。

おもな作品：「黄色い涙」（NHK銀河テレビ小説）、「傷だらけの天使」（日本テレビ）、「新・坊っちゃん」（NHK）、「幻のぶどう園」（NHK銀河テレビ小説）、「グッドバイ・ママ」（TBS）、「黄金の日日」（NHK大河ドラマ）、「失楽園'79」（NHK土曜ドラマ）、「風の隼人」（NHK）、「港町純情シネマ」（TBS）、「万葉の娘たち」（NHKドラマ人間模様）、「ダウンタウン物語」（日本テレビ）、「君はまだ歌っているか」（NHK土曜ドラマ）、「淋しいのはお前だけじゃない」（TBS）、「誰かが私を愛してる」（TBS）、「山河燃ゆ」（NHK大河ドラマ）ほか。

ダウンタウン物語（前篇）

1984年8月10日 初版第1刷発行

著 者 市川森一

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

振替東京 6-4123 Tel. 291-7651（営業）294-6711（編集）

郵便番号 101-91

印刷・理想社印刷所 製本・積信堂

0096-80245-4604 ©SHIN'ICHI ICHIKAWA, 1984

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

第1回	ああ、ベツレヘムよ	3
第2回	魔女は教会がお好き	31
第3回	誘惑	59
第4回	甘きぶどうの香り	85
第5回	奇蹟	111
第6回	悪魔と天使の間に	137
第7回	洗礼	165
第8回	女に石を投げよ	189

日本テレビ
昭和56年1月13日～3月3日放映

ダウンタウン物語（前篇）

スタッフ

制作	清水欣也	演出	吉野洋	演出	祖父江信太郎	音楽	荒木一郎	美術	平井堯	技術	伊藤邦雄	照明	伊藤正雄	音声	戸田幸夫	カメラ	片野憲司	効果	宮下博行	演出	雨宮望	制作	中山秀一	脚本	矢野悦子	監修	林田彦
----	------	----	-----	----	--------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	-----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----

キャスト

風見呼子	桃井かおり	塩谷伊作	川谷拓三	石毛月世	市原悦子	乾隆	田村亮	白浜健	佐藤浩市	西本政美	にしきのあきら	マッキー	赤塚真人	坂本刑事	桜井センリ	勝山刑事	小林稔侍	杉田雪江	中原早苗	山本幸子	南風洋子	村松宮子	原知佐子	山口貞子	小夜福子	上海竜	水島道太郎	高階礼二	平田昭彦	池上純一郎	篠田三郎	リタ夏木	夏目雅子	風見蘭子	岡田茉莉子
------	-------	------	------	------	------	----	-----	-----	------	------	---------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-------	------	------	-------	------	------	------	------	-------

○葡萄畑の夢の世界

彼女は、夢をみている。

幼い頃にすごした甲府のおどう園の美しい風景だ。

そこには、クリスマススの讃美歌（二一五番）のコーラスが流れている。

「ああベツレヘムよ などかひとり

星のみ匂いて ふかく眠る」

夢の画像が、乱れ始めた……。

医者（声）が聞こえる。

医者（声）「切迫流産だ。月が経ってないのが命拾いだつたね」

○産婦人科医院・診察室（夜）

ぼやけていた視界が次第にはっきりしてくる。

麻酔から覚めてくる、風見呼子（^{ヨブコ}27）の白い顔。

呼子「……（耳が何かを追う）」

遠ざかる讃美歌のコーラス。

○同・待合室（夜）

血の気を失った顔で診察室から薄暗い待合室に出てく

る呼子。肩に掛けたコートの下には黒いドレスがのぞく。一見したところ、クラブの歌手か？ それとも、クリスマススのパーティ帰りの令嬢か？ 正体は定かならぬ。

玄関口で靴を捜すが、ない。

呼子「（窓口に引き返して声を送る） 済みません。靴をだしてください」

老看護婦（声）が返ってくる。

看護婦（声）「靴？」

呼子「私の靴が見当たらないから……」

看護婦（声）「下駄箱にいれました？」

呼子「いいえ、そこに脱いで上がりました」

看護婦（声）「どうして下駄箱に入れなかったの？」

呼子「……死にそうなくらいお腹が痛くて転がりこんだのよ」

看護婦（声）「下駄箱に入れて鍵掛けとかなきゃ、そりゃ、もってかれますよ」

呼子「かるく言わないでよッ。イタリア製の五万円のヒールなのよッ」

看護婦（声）「五万?! そりゃ、なくなるワ」

呼子「弁償してッ」

○同・表（夜）

雪が降っている。

下町の古い産婦人科の医院から、スリッパ履きの呼子がでてくる。

ポーツと、船の汽笛。

○街角（夜）

タクシーを停めようと、シルバーのハンドバッグを振り回す呼子だが、降りだした雪とイブの夜のせい、か、停まってくれる車もない。

○波止場通り（夜）

呼子が、熱っぽい体を引きずるようにして、雪降る波止場を歩いていく。

停泊中の客船（氷川丸）から、クリスマスパーティーの音楽が聞こえてくる。

呼子「（立ち止まって見る）……」

客船のレストランの明かりが、おとぎ話の世界のよう

に闇の中で輝やいている。心細く歩きだす呼子。栈橋のビットに酔ったサンタクロースがうずくまっている。

海面に浮かぶ、呼子によく似た西洋人形。波止場の夜景に――、
タイトルが流れる。

第一回「ああ、ベツレヘムよ」

キャスト

スタッフ

○ドヤ街の路地（夜）

清しこの夜

星は光り

聖歌隊のキャンドル・サービス。

悪タレ顔の子供たちが七人と、老婆（山口貞子・70）に、ヒゲ面の小男は、牧師の塩谷伊作（35）。

めいめい白衣を被り、ろうそくと讃美歌をもって歌っている。

雪はドヤ街にも降っている。

仲仕たちが、屋台のそばを立ち喰いしながら、うさくさ氣に聖歌隊を眺めている。

いつもは無法地帯のこの地区も、今夜だけは、聖夜のムードに包まれている、と見えたのも束の間——仲仕に変装した刑事が二人（ひとりとは坂本刑事）、屋台で酒を飲んでいた指名手配の男に近づき、たちまち、捕り物騒ぎとなる。

聖歌隊のままで、しこたま乱闘の末、坂本刑事に手錠を掛けられ連行されてゆく犯人。

その間、聖歌隊は恐怖を感じながらも、歌いつづけている。

その聖歌も、パトカーの走るサイレンの音に吹き消されてしまう。

○西港町教会・表通り（夜）

聖歌隊のキャンドルが雪の道を帰ってくる。

古いレンガ建ての小さな下町の教会（プロテスタント系）が簡易ホテルなどの汚い建物にはさまれてある。

少年E「ひとが倒れてるッ」

伊作「え？」

教会の門前に、裸足の呼子がうずくまっている。

伊作、驚いて駆け寄り抱き起こす。

伊作「どうしましたッ」

意識モウロウの呼子。

伊作「大丈夫ですかッ」

呼子「（血の氣のない顔を上げる）ここは……」

少女C「裸足だ。寒そオ」

少年B「痴漢にやられたんだ」

貞子「血はでてない？」

伊作「怪我はないみたいだけど、熱があるな。みんな、この人を教会に運びなさい」

子供たち、ワーッと呼子にたかり、呼子の体を浮き上がらせるようにして教会の中へ運びこむ。

しんがりの貞子が、呼子のハンドバッグを拾い上げる。

この婆さん、素早い手つきでバッグを開けて中をあさる。三万円でてくる。

婆さん、ニンマリと金だけ抜きとり、なに喰わぬ顔で、みんなのあとにつづく。

○同・礼拝堂（夜）

呼子をかつぎこんだ子供たち、伊作の指図でテキパキと働いている。

伊作「椅子でベッドを作って。もつと、ストーブの傍に寄せよう。だれか、私の部屋から、毛布を持ってきて、枕も」

少女A（アリス）、奥の牧師館に駆けこむ。

伊作が、おんぼろのガスストーブに点火する間に、子供たちが長椅子で作った即席ベッドにコートのまま呼子を寝かせる。

白雪姫を眺める小人たちのように呼子を覗きこむ七人の子供たち。

少年B「医者呼んでこよか」

少女C「本人に確かめないと、アリガタ迷惑だってことも

あるのよ」

少年D「警察に連絡しよか」

少年E「よしな。関わり合いになるのは真ッ平だ」

少年F「コート、脱がせようか」

少女G「動かさない方がいいわ」

少年D「呼子の額に手を当てて」熱あるな」

少年E「（Dの手をパシッと払いのけて）判りもしないのに、さわるなよ」

少年D「痛エなア」

アリスが毛布と枕をもって駆け戻ってきて伊作に渡す。

伊作「ありがと」

伊作、毛布を呼子に掛け、枕を敷く。

呼子「（弱々しく）済みません……」

伊作「具合いは？ 病院に行きましょるか」

呼子「（首を振る）いいえ……しばらく、休ませてください」

伊作「いいですとも。ひとまず、体を温めなさい」

貞子「先生、これ、落ちてました（と、ハンドバッグを差し出す）」

伊作「ありがとう。あなたのですね（と、呼子の手に返す）」

少年B「先生、このあとは、おしるこがでるんだらう」

伊作「おしるこ？」

少年E「さんざん寒い思いして歌ってきたんだからよ、おしるこぐらいだすのは常識じゃん」

伊作「（困惑）おしるこは、作ってないんだがな……」

少年D「ゲッ、それはないじゃん」

ブツブツさわぎだす子供たち。貞子までが、不服面で、

貞子「去年の牧師さんは、おしるこふるまってくれたんですがね」

少女C「坂の上の教会じゃ、クリスマスケーキに、セータ

ーやマフラーのプレゼントもあるんだって」

少女G「あっちの教会行けばよかったね」

少年B「来るとこ間違ったよな」

少年F「このままじゃ帰れないよ」

伊作「みんな静かに！……（汗を拭いて）ケーキや、おし

ることはないけど、クリスマスプレゼントがあるから、おとなしく並んで。いまあげます」

「なにくれるんだろ」「期待しない方がいいみたい」

「早いところもうものもらって帰ろうぜ」などと悪タ

レだらだと、クリスマスツリーの横に一列で並ぶ子

供たち。

伊作、ツリーの下の箱から、リボンで結んだ鉛筆を一

本ずつ取りだして子供たちに手渡ししていく。

伊作「ハイ、メリー・クリスマス」

少年B「（鉛筆をもらって）エンピツ一本だけ？」

伊作「（次の子に）ハイ、ご苦労さん」

少年D「コレが日当？」

伊作「日当じゃないよ。神様からの贈り物だ。感謝していただきなさい」

少年D「（ふてって）アーメン」

伊作「メリー・クリスマス」

次々に鉛筆を渡すが、どこの子も、仏頂面で受けとつていく。中で、最後のアリスだけが、

アリス「（うわ目づかいで）ありがとう」

と、まともにお礼の言葉を口にする。

伊作「（ホッと微笑いが浮かぶ）……」

貞子も、チャッカリ手を差しだす。

伊作「あ……ご苦労さまでした」

貞子「（鉛筆をもらって）どうも」

少年B「さア、みんな帰るか」

白衣を脱ぎ捨てて帰りかける子供たち。

伊作「待って、待って！ まだ、お祈りが残ってるよ」

少年E「お祈りなんて」

伊作「駄目だよッ、最後のお祈りをして行かなきゃッ。さア、みんな戻ってッ、手を組んで、目をつぶってッ」

伊作、子供たちをツリーの下にかき集めて、祈りを始める。

伊作「神さま、こんなにも楽しいクリスマスがあります。ありがとうございます。また、神さま、こんなにも素敵なプレゼントをありがとうございます」

伊作の祈りがつづいている間に、少年B、少女C、少年D、E、F、少女Gが、ひとり抜け、ふたり抜けして、ぬき足で礼拝堂から逃げだしていく。

祈りをつづける伊作。

呼子、ジッと見ている。

伊作「今宵は、神さまの大切な赤ちゃんを、私たちのために、この世にくださって本当にありがとうございます。」

この世に光と力とが与えられましたことを感謝致します。貧しい人々に恵みを、淋しい人々に慰めを持ち運ぶ者として、小さい私たちをどうぞ用いてください。イエス様の御名によってお祈り致します。アーメン」

伊作の祈る言葉に、悲しくなってくる呼子……我慢する。

呼子「……」

伊作が、祈り終わって目を開けたときには、アリスと

貞子の二人だけになっている。

伊作「苦笑」……どうして、残ったの？ 一人だけ」
アリス「先生が、可哀相だからヨ」

十歳位にしては色っぽい視線をなげて、踵をかえす。
啞然と見送る伊作。

貞子「笑って」あれで四、五年も待てば、立派に女房にできますよ、先生」

伊作「（取り合わず）お婆ちゃんも気をつけてお帰りなさい」

貞子「ハイ、それじゃ、また日曜日に。（呼子の方を気づかって）先生、あちらは」

伊作「大丈夫」

貞子を玄関まで送って行く。

○同・玄関（夜）

貞子、伊作に耳打ち。

貞子「（低く）深入りしない方がいいですよ」

伊作「え？」

貞子「あの女。ちよいと、うさんくさいわね」

伊作「おやすみなさい。足もと滑らない様に気をつけてね



(と、追い払う)

貞子、去る。

○同・礼拝堂(夜)

伊作が、呼子のもとへ戻ってくる。

弱々しく見上げる呼子。

伊作「私で役立つことがあれば、どうぞ、仰言ってください」

呼子、半身を起こす。

呼子「電話を貸して」

伊作「(ドキッと) デンワ……」

呼子「ウチに掛けたいの……」

伊作「(赤面) 電話が……いまは、その、目下使えない状態……」

呼子「故障……」

伊作「いえ、電話料金を滞納しているので、交信を止められて……」

呼子「(めずらしそうに) はア……」

伊作「あの、おさしつかえなければ、私が、代わりに掛けてきますが、公衆電話で」

貞子「(低く) 深入りしない方がいいですよ」

伊作「え？」

貞子「あの女。ちよいと、うさんくさいわね」

呼子「ワルイわ、わざわざ」

伊作「近くですから、御遠慮なく……」

呼子「……迎えに来てもらいたいです。私の兄に」

伊作「そういう用件なら、むしろ、私からの方が……この場所も、正確に説明できますし。どうぞ、お宅の電話番号を」

呼子「六六一・一三四五。兄と二人暮らしなんです」

伊作「六六一・一三四五。(メモして) すぐに行きますから、安心して休んでください(玄関へ)」

呼子「あの……。 (と、呼び止めて) ついでに、私の靴を持ってくるように言ってください……」

伊作「判りました。そうだ、お兄さんの名前を、念のために」

呼子「隆ッていいます」

伊作「はい。それじゃ、すぐに(出て行く)」

○同・表通り(夜)

伊作牧師が雪の道へ駆けだしていく。

○同・礼拝堂(夜)

呼子、ベッドで半身を起こしたまま、ハンドバッグを開けて煙草を取り出す。

金がなくなっている?!

呼子「ヌカレタ……」

○街角の公衆電話ボックス(夜)

伊作が手帳を確かめながらダイヤルを回している。降りつづける雪。

呼びだしが掛かるが、先方は、なかなか出てこない。掛け直そうかと受話器を下ろしかけたとき、やっと、女の声がでてくる。

女(声)「(電話) ハーイ」

伊作「(女の声に一瞬ひるむが) ……あの、夜分に失礼します。私は、西港町教会の牧師で塩谷と申しますが、隆さんはいらっしゃいますか」

女(声)「(酔っている) タカシさん? フーン、あいつ、タカシって名前なの。いま、シャワー浴びてるから、あとで掛け直して」

伊作「モシモシ、切らないでッ。それじゃ、あなた、取り次いでください。隆さんの妹さんを、いま、うちの教会

でお預かりしているんです。高熱をだして、行き倒れていらしたので。それで、隆さんに、迎えに来ていただきたいんですが、靴をもって」

女（声）「待ってね」

伊作「済みません」

——間。

ガラス越しに舞い落ちる粉雪。

伊作「（独言）私もドジだなア。あの人の名前も聞かずにでてきてしまった……」

受話器に女の声が戻ってくる。

女（声）「あのネ、アンタ、お電話掛け間違いだって」

伊作「え？」

ガチャンと切れる。

伊作「?!……（受話器を戻して、手帳を見直す）掛け間違いい?……（またダイヤルを回す）」

コールする。

女（声）「掛け間違ったって言うのでしょッ」

女（声）「掛け間違いだと言ってでるでしょッ」と言い捨てて、切れる。

伊作「……（仕方なく出て行く）」

○道（夜）

帰っていく伊作が、ふいと立ち止まる。

伊作「靴、どうしよう……（腰の懐中時計を取り出して見る）」

○質屋の表（夜）

伊作が閉店した質屋の呼リンを押しつつづけてやっと明かりがついて、中から女主人宮子（43）の不愛想な声。

宮子（声）「しつこいわねッ。だれよ、こんな時間に」

伊作「西港町教会の塩谷ですが……」

鍵がはずされて戸が開き、ナイトガウンをはおった宮子が顔をだす。

伊作「申し訳ない」

宮子「なんですか」

伊作「（懐中時計を差し出し）これを、預かってもらえませんか」

宮子「明日にしてくださいよ。もう、金庫も閉めちゃってるから」

伊作「いえ、お金はいいです。代わりに、奥さんの、靴を

貸していただけませんか」

宮子「私の靴を？」

伊作「ハイヒールがあれば、なお有難いですが……（と、懐中時計を宮子の掌に握らせる）」

○西港町教会・礼拝堂（夜）

呼子がストーブで温まっている。

伊作が手に新聞紙の包みをもって、バタバタと帰ってくる。

伊作「電話番号を、私、聞き間違えてしまったようで、いや、六六一の一三四五に掛けたら御婦人が出てこられて、掛け間違いだと怒られてしまいました」

呼子「?!……」

伊作「もう一度、行つてきますから、申し訳ありませんが、電話番号と、あなたのお名前も、ついでに（と、手帳をかまえる）」

呼子「……風見呼子といひます」

伊作「ヨブコさん。（メモして）電話番号は……」

呼子「（ためらつて）……温まったら、具合もよくなつてきましたから、迎えはいらないみたいです……」

伊作「ひとりで帰れますか」

呼子「ええ……」

伊作「そうですか……じゃア、コーヒーでもいれてきましょう。……そうだ（新聞包みを差しだし）コレ、履いてってください」

呼子「（受けとつて開いてみれば）?!……」

古いハイヒール。

伊作「近所の知人から借りてきたんですが、サイズが合えばいいですが、合わなくても、裸足よりはいいでしょう。ただ、その、借り物ですから、いづれ返していただかないといけません」

呼子「（感謝のまなざしで頷く）……」

伊作、牧師館へ去る。

呼子「（ハイヒールを抱きしめて、悲しい）……」

○同・牧師館の台所（夜）

伊作が、インスタントコーヒーをいれている。食パンと塩などがある程度の貧しいキッチン。

礼拝堂の方から、オルガンの調べが流れてくる。

伊作「?……」